

課題部門 テーマ：SNS について考える

優良賞「トリツカレ」

現代ビジネス学部国際観光ビジネス学科 3 年 1 組 中田 希美

私を含め、現代の女子は“トリツカレ”ている。さて、何に“トリツカレ”ているのか。タピオカドリンクを飲むこと？プリクラを撮ること？はたまたダイエットやメイク等で自分磨きをすること？残念ながら、どれも不正解である。私たちは「インスタ映え」する写真を投稿し、多くの“いいね！”を獲得することに“トリツカレ”ているのだ。

今日では、SNS を何もやっていない、という人を探すことが難しいほど世の中にインターネットが普及している。その SNS の 1 種である Instagram は、有名人のプライベート写真を見ることがや、料理やファッション、飲食店等の情報を得ることができるため世界中で多くの人に利用されている写真共有アプリである。投稿する写真は、コーデやカフェで食べたスイーツ、桜や紅葉、建物等の風景、ペット、など人それぞれである。いわば、私たちにとって Instagram は“デジタル化された日記”である。言葉だけでなく写真とともに思い出を記録しておくことで、その日の出来事を鮮明に思い出すことが可能となる。また、自分の思い出を他者と共有し、人から“いいね！”をもらうことで承認欲求も満たされる。

しかし、この承認欲求が私たちを苦しめていることにお気づきだろうか。人間は、貪欲であるため、“いいね！”をもらえればもらうほど、もっと“いいね！”がほしくなってしまう。そのために写真を何枚も取り直したり、写真映えする食べ物を提供しているお店や景観の場所へ足を運んだ経験はないだろうか。このように、私たちは、“映える”ことに“憑りつかれ”ることで、写真を“撮り疲れ”ているのである。実際に、“いいね！”は人間に心理的な影響を与えることが証明されている。例として挙げられるのは、四六時中“いいね！”をもらえるかどうか気になってソワソワしたり、“いいね！”をもらえないと不安や孤独感を感じてしまう、などである。私自身も Instagram に写真を投稿すると、誰かから反応はないものか、私の写真を気に入ってくれたり、褒めてくれる人はいるのだろうか、と期待や不安を抱いてしまう。“いいね！”をたくさんもらえると喜び、そうでないと落ち込む。このように私たちは、たかが“いいね！”の数で一喜一憂してしまうのだ。

最近、Instagram は人々への心理的な影響を軽減するために、投稿した本人以外に“いいね！”の数が表示されない仕組みを試験的に行っている。フォロワー数や“いいね！”の数は多ければ多いほど個人のステータスとなる。しかし、フォロワーの数が多ければ、

個人の考え方はさまざまであるため、共感を得ることが難しいだけでなく心無いコメントを受け取る可能性も高まる。そもそも、私たち一般人にとって、バーチャルな世界での他者からの評価は必要だろうか。少なくとも私は必要だと思わない。自分の身近な存在である家族や友人と同じ時間を共有する方がよっぽど大切ではないだろうか。人々がフォロワー数や“いいね！”の数で評価されることへのストレスを減らす面で、この取り組みはとても役に立っていると言える。

先に述べたように、幸か不幸か現代はインターネットが普及しすぎている。生まれたころからスマートフォンが身近にある、という世代が誕生しているのである。SNS の利用によって、人、特に若者は自分だけの世界にのめりこんでしまうのではないか、と思う。そう思うようになったきっかけは、女の子 2 人が一緒にいるのにおのおののスマートフォンを操作している様子をよくみかけたときだった。せっかく一緒にいるのに同じ時間を共有するのではなく、各個人が自分だけの世界にのめりこんでいるのを見るとなんだか悲しくなる。沈黙が悪い、と言いたいのではない。むしろ、沈黙が苦でない関係は、お互いが心を許している証拠だと思う。誰かと一緒にいるのなら、1 人ではできないことをしたいし、してほしい。例えば、紅葉スポットに行って「きれいだね」という言葉を言い合うとか、異なる味のスイーツを頼んで半分ずつ食べる、とか。「がんばれば 1 人でもできるじゃん、」と言われればそれまでだ。しかし、そのとき感じる気持ちは、1 人と 2 人とでは全く異なるだろう。誰かと同じ時間を、そして同じ気持ちを共有できる。SNS を通してでは感じられない気持ちに、目の前にいる人とならなれる。

SNS は間違いなく便利かつ私たちの生活の一部と化している。そしてこれから先も、その存在が消されることはないだろう。しかし、たまには SNS というバーチャルな世界から抜け出すのも悪くはないだろう。他者からの評価を気にせず、自分がしたいことを自分のしたいようにすればいい。なぜなら、自分の人生は自分で決めるものなのだから。

ねえ、そこの“トリツカレ”ている女子？“憑かれ”るのも“疲れ”るのも、もうやめよう。

“トリツカレ”すぎて病気になったり、大切な存在や物を失う、という“トリカエシ”のつかない事態が起きる前に。

< 講評 >

SNS の世界に蠢く承認欲求について分析的に表現している作品である。SNS に関しては評論家的な論調が多い中、素朴な自分自身の経験と考えを述べている点が優れている。SNS の便利さに筆者自身も身を置いているからこそ見えている心理的世界が素直に表現されている。一方でそこに埋没することなく、客観視したいとの葛藤や意思が表現されており、読み手の興味をそそる作品である。スマホや SNS が、若い世代をどういう地点に追いやっ

てしまったか、ユーザーの側からの告白である。ネット社会に固有の現象を「トリツカレ(憑りつかれ)」という見事な表語で集約して見せた作品である。人間の「承認欲求」を認める客観性をも持ち合わせており、常に「群れていたい」日本人に対する警鐘を鳴らしている。最後の「ねえ、そこのトリツカレている女子？」から「トリカエシのつかない」のユーモアセンスに脱帽。

審査委員／永田彰子、吉目木晴彦、大庭由子、西村聡生、富岡治明（委員長）